総合医学会報告

2022年シンポジウム：『専門医取得をめざす若手医師達へ 病理×臨床win-winな関係を目指して,今更聞けない病理部門とのつきあい方を伝授する.』

専門医取得を目指すDr達へ！real world で病理医が臨床医に求めるもの：総論

中園裕一† 高妻 葵*

第76回国立病院総合医学会
2022年10月7日 於熊本

IRYO Vol. 77 No. 6 (405－409) 2023

要旨 なにかとマイナスなイメージを持たれがちな病理医であるが，今や診断・治療・研究と多岐にわたる分野で不可避の存在であることも事実で，そんな病理のreal worldを病理医自らが語ることにより，病理を身近なものとして感じてもらい，医師人生を送る上で有用な「病理と臨床のwin-winな関係を構築すること」を本シンポジウムでは目指した．

総論パートではまず，検体採取から病理診断に至る過程として，固定→依頼紙の記載→切り出し→包埋→薄切→染色の手順があることを述べ，それぞれにおいて臨床医として注意してもらいたいポイントを列挙したので，ぜひ実臨床に活用してもらいたい．また，病理医と関わる機会が多いと思われる研究や学会発表における注意点や，実際に病理をローテーションした研修医の視点からの発言も盛り込んだ．本シンポジウムを通じて，病理と臨床の相互理解が生まれる一助になることを願う．

キーワード 病理，臨床，総論

はじめに

「病理」と聞いて臨床医がイメージする像はどんなものであろうか？「学生の頃に延々とスケッチばかりさせられた」「気難しい先生が多そう」等々，マイナスなイメージを持ったまま渋々病理と関わっている方が多いのではないだろうか？ しかし，病理部門が今や診断・治療・研究に至るまで多岐にわたる分野と関係しているのは紛れもない事実であり，診療を行う上で病理医は不可避の存在だ．つまり，現場で活躍できる臨床医になるためには，病理との関係を上手く構築することが一つのポイントになるかもしれない．

本シンポジウムでは，お世辞にも親しみやすい分野とは言い難い病理のreal worldを病理医自らが語ることで，とくに専門医を目指す若手医師に病理を身近なものとして感じてもらい，今後の医師人生を送る上で有用な「病理と臨床のwin-winな関係を構築すること」を目指した．各分野のエキスパートたちによる各論に入る前の序章として，この総論パートでは検体作製から診断に至るまでの流れ，一般的な検体の取り扱い方，依頼紙の記載方法，検体不良

国立病院機構別府医療センター 病理診断科 ＊初期臨床研修医 †医師
著者連絡先：中園裕一 国立病院機構別府医療センター 病理診断科医長
〒874-0011 大分県別府市大字内竈1473番地
e-mail：nakazono.yuichi.wr@mail.hosp.go.jp
(2023年3月7日受付 2023年6月9日受理)
To All the Doctors Who Want to Become A Specialist! What Pathologists in the Real World are Looking for in Clinicians: A General Introduction
Yuichi Nakazono and Aoi Kozuma*
Department of pathology, NHO Beppu Medical Center, ＊NHO Beppu medical center
(Received Mar. 7, 2023, Accepted Jun. 9, 2023)
Key Words：pathology, clinicians, general introduction